

2019 年度

東洋大学審査学位論文の要約

在日コリアン教会の歴史的展開に関する社会学的研究

—エスニック・チャーチの継承／変容に注目して—

社会学研究科 社会学専攻 博士後期課程

4510150001 荻翔一

1. 目次

序章	研究の目的・視点・方法
第1章	在日コリアン社会の形成と変容
第2章	朝鮮（韓国）におけるキリスト教の歴史的展開と新旧コリアンへの影響
第3章	エスニック・チャーチとしての存続と葛藤—在日大韓基督教会の再建を支えたアクターに注目して—
第4章	在日コリアンのエスニック・チャーチからマイノリティのための教会へ—在日大韓基督教大阪教会を事例に—
第5章	在日ホーリネス教会の再建と変容—東京・大阪・広島を事例に—
第6章	在日コリアンのエスニック・チャーチから日本宣教を行う教会へ—広島第一教会を事例に—
第7章	宣教団体の支援による再建と葛藤—戦後における東京福音教会の再建過程—
第8章	在日コリアンのエスニック・チャーチの維持—東京福音教会を事例に—
補論	国際結婚夫婦の信仰生活—信仰の深化と教会への帰属意識—
終章	考察と結論

2. 本研究の背景と目的

本研究が対象とする在日コリアン教会（在日コリアンが中心となって設立したプロテスタント教会）は、いわゆるエスニック・チャーチ（移民が中心となる宗教組織）として戦前から戦後にかけて各地に設立された。戦時下には日本の教会への編入を余儀なくされ、エスニシティを強調することを抑圧された。終戦後は日本の教会から脱退し、紆余曲折がありながらも各々の教会はエスニック・チャーチとして再建を果たした。

しかし、日本社会における在留外国人の増加にともなう多文化化（1980年代～）や、韓国社会における韓国キリスト教の急成長（1960年代～）とその後の海外布教の活発化（1990年代～）を背景に、1980年代以降、在日コリアン教会にも韓国系ニューカマー（や日本人など）が集うようになった。教会内における在日コリアンの存在が、「オンリーワン」から「ワンオブゼム」へと変化したのである。それを受け、各教会では従来のエスニック・チャーチとしての在り方の見直し／刷新といった動きがみられるようになった。

そこで本研究では、これまで国内の研究でなされてこなかったエスニック・チャーチの継承／変容に着目し、①終戦後から1970年代までの在日コリアン教会の歴史的展開を明らかにしたうえで、②1980年代以降の教会内の多文化化への対応策（組織マネジメント）の特徴を分析することを通して、変容パターンを析出すること、③変容パターンを左右した組織マネジメントの規定要因を明らかにすることを主目的とした。

在日コリアンの宗教を扱った先行研究では、歴史的展開を取り上げているものの、エスニック・チャーチの継承／変容という観点からは詳細に分析されてこなかった。それゆえ、本論文の関心から言えば重要な出来事である、本国から新たに来日した人々（韓国系ニューカマー）の参与にそれほど注目がなされてこなかった点は課題だといえる。またその他にも、在日コリアン教会の大半が所属する超教派の在日大韓基督教会以外の事例がほとんど扱われてこなかったことや、教会が立地する地域社会の与える影響についても、ほとんど考慮されていなかったことが課題とし

てあげられる。

そこで、分析視点として、本論文では在日コリアンと韓国系ニューカマー（新旧コリアン）をコリアン社会内部の下位集団、すなわち、サブ・エスニック集団として措定し、分析に組み入れた。新旧コリアンは、同じコリアンであり同一のエスニック集団に属する。しかし、両者は来日の時期や経緯が異なるがゆえに、文化的差異や出身地（ホスト国）との関わり方の違いが大きいことに加え、受容してきたキリスト教のスタイルが少なからず異なることから、同じキリスト者であっても教会の奉仕活動への取り組み方や礼拝スタイルなどに違いがみられるといえる。この両者の関係、差異に注目しながら分析することとした。

また、各教会の組織マネジメントの方向性を規定した要因として、長老制（聖職者である牧師と信者の代表である長老が合議の末、教会運営を行っていく教会政治制度）における牧師 - 長老間の力関係のグラデーションと、各教会が置かれた地域的なコンテクストの2点を仮説的に提示した。

前者について、在日コリアン教会の大半は長老制を採用するか、明確にしないまでもその影響下にある。しかし、その運営を決定する牧師 - 長老間の力関係は教会ごとに様々なパターンがあると考えられる。また宗教組織内部の要因だけではなく、外的要因（特に地域的なコンテクスト）にも注目するのは、高橋典史が指摘しているように、移民に関わる宗教の〈社会的形態〉がどのような社会的、文化的な条件によって成立するのかを調査するためには、「移民」と「宗教」内部だけでなく、地域社会（local community）との関わりがしばしば重要になるからである（高橋 2013: 442）。

本研究の主な調査方法は、教会が発行した資料などを分析する文献調査、牧師や信者など教会関係者に対する聞き取り調査、日曜礼拝などの参与観察である。

調査対象については在日コリアン教会の様々な展開上のバリエーションを明らかにするという観点から、組織形態や地域が異なる複数の教会を扱った。第一に超教派の在日大韓基督教会に所属する大阪教会（大阪府大阪市生野区）、第二に朝鮮のホーリネス系の宣教師によって設立され、現在は日韓双方のホーリネス教団に属する広島第一教会（広島県広島市東区）、第三にアメリカの宣教師の援助によって設立され、現在は単立教会である東京福音教会（東京都荒川区）である。渡戸一郎の類型によれば、生野区や荒川区は典型的な「オールドタイマー中心型」 - 「大都市インナーシティ型」の外国人集住地域である（渡戸 2006: 119）。広島市も同類型に準ずるものとして本論文では位置づけた。同類型はオールドタイマーが中心でありながらも大都市に位置するため、韓国系ニューカマーが集う傾向にあり、新旧コリアンの混在化がみられやすい地域だと考えられる。ただし、同類型内でも地域によってその特色は異なるため、各地域の特徴と教会の変容をリンクさせて考察することとした。

3. 各章の概要

序章では本研究の目的、先行研究の検討、分析視点、調査対象の概要を説明した。

第1章では、在日コリアン社会の形成と変容について概説した。戦前に形成された在日コリアン社会は、日本の敗戦にともない人口減少が生じるとともに、南北分断を背景とする同胞間での対立を経験した。その後、時代経過とともに在日コリアンの世代交代や日本人との国際結婚によ

るミックス（ダブル）の誕生、帰化者の増加など、在日コリアン社会の多様化がみられるようになった。1980年代以降は南米や東南アジアなどから来日する人々が急増し、在日外国人もまた多様化した。さらに、同じコリアンである韓国系ニューカマーの急増を背景に、在日コリアン社会とは必ずしも連続的ではない新たなコリアン社会が別個に形成されてきたことを論じた。

続いて第2章では、朝鮮半島におけるキリスト教（プロテスタント）の歴史的展開について述べた。カトリックよりも遅れて来朝したプロテスタントは、比較的早期に王朝の庇護を受け布教を進めていった。1907年のリバイバル運動などを経て次第に受容されていったが、人口比でいえば数%のマイノリティ集団であり、広く民衆に受け入れられたわけではなかった。

韓国社会においてキリスト教（プロテスタント）が急成長したのは1960年代以降であった。現代における韓国キリスト教の特徴としては、教会活動が増加したり、祈りの機会が増えるなど新たな宗教様式が形成・定着し、海外布教によってそれが日本にも展開するに至った。その影響を受けて、新旧コリアンそれぞれの社会ではキリスト教の立ち位置や特徴が異なること、1990年代以降、韓国キリスト教的な宗教様式が在日コリアン教会にもみられるようになったことを指摘した。

第3章では、在日大韓基督教会の再建過程を明らかにした。戦時下に日本の教会への編入を余儀なくされた在日大韓基督教会は終戦後、直ちに脱退し、改めて在日同胞のための教会として再建を目指した。しかし、南北朝鮮の分断を背景に教団名の一部を「朝鮮」から「大韓」に改称するなど韓国支持の方向に舵を切った。またヒト・モノ・カネが不足する終戦後の状況下において、特に個別教会の再建過程にあたっては、各地の在日本大韓民国民団（民団）との協力・提携関係がみられた。それは円滑な再建と引き換えに、在日本朝鮮人総連合会（総連）関係者の教会離れを招くものであり、在日同胞全般への布教は困難なものとなった。このことから、在日大韓基督教会は戦後、韓国支持や民団との関係構築を図ることで、在日コリアンのためのエスニック・チャーチとして、その復興を円滑に進めていくことができたものの、それは当初の在日同胞のための教会という宣教理念との齟齬を生じさせるものでもあったと指摘できる。

第4章では、日本最大の在日コリアン集住地域である大阪府大阪市生野区に立地する、大阪教会の地域福祉活動（老人大学）を取り上げ、1980年代以降の動向から、その組織マネジメントの特徴を明らかにした。この時期、日本社会の歩みとともに、在日大韓基督教会においても教会構成員の多文化化がみられ、韓国系ニューカマーや日本人が参与するようになった。そうした中で宣教理念は在日コリアンのためのエスニック・チャーチから、多様なマイノリティのための教会へと路線が変更された。

それを端的に示しているのが教会の社会活動である。在日大韓基督教会は1960年代末以降、社会活動に参加するようになったが、近年は在日コリアン以外のマイノリティ（在日外国人やアイヌ、被差別部落の人々）の支援も展開している。大阪教会が行う老人大学は、2000年に赴任した現牧師（韓国系ニューカマー）が提案し、在日コリアン長老らの満場一致での同意のもとで2004年から実施されるようになったという経緯があり、牧師 - 長老間の力関係に大きな偏りはみられなかった。同活動は国籍・宗教問わず、65歳以上の地域住民なら誰もが参加できる生涯学習支援

活動であり、在日コリアン以外にも手を広げるようになった在日大韓基督教会の宣教理念と方向性が合致しているといえる。ただし、実際の参加者は地域の特徴を反映してその大半が在日コリアンであり、彼／彼女らのコンテクストに配慮したプログラム（識字教室など）が用意されている。その活動を支えているのが、活動を始めた韓国系ニューカマー牧師と、同じく韓国系ニューカマー信者のボランティアスタッフであった。

以上から、大阪教会は在日コリアンに留まらず、他のマイノリティを包摂する理念を掲げ活動する一方、教会内の多文化状況を積極的に活用し、在日コリアンに特化した取り組みにも注力していることがわかる。こうした同教会の組織マネジメントは、在日コリアンのためのエスニック・チャーチとして部分的に維持させつつ、さらにその対象を拡張させたものだといえる。

第5章では、在日ホーリネス教会（プロテスタントの中でもホーリネス信仰を核とする在日コリアン教会）の再建過程を明らかにした。戦前、朝鮮半島から来日した宣教師が複数の在日ホーリネス教会を設立した。だが戦時下のホーリネス弾圧の影響で、そのほとんどが解散・他教会への合流を余儀なくされた。終戦後は韓国からの支援は見込めず、自力での再建も困難な状況にあった。それゆえ、エスニック・チャーチとして再建するには、超教派の在日大韓基督教会の支援を受けること、あるいは加入することが、ほとんど唯一の方策であった。そこには少なからず、ホーリネス系信者の葛藤がみられたため、中にはホーリネス教会を立ち上げ、日本ホーリネス教団の支援を受けたケース（広島第一教会）もあったが、そうした教会では日本人の参与による文化的な葛藤が生じ、日本人が中心となる教会が別個に設立されるに至った。結局のところ、戦後復興を果たした在日ホーリネス教会は、教会によって支援を受ける教団は異なっていたが、結果的にいずれも、在日コリアンのためのエスニック・チャーチとしての形態を維持したまま活動を続けることとなった。

第6章では、在日コリアン集住地域の一つである広島県広島市に立地する在日ホーリネス教会の広島第一教会を事例に、1980年代以降の動向から、その組織マネジメントの特徴を明らかにした。広島第一教会は1960年代前半に在日コリアン牧師を迎えたものの、在日コリアン信者は牧師不在の時期や異動により、同市の他教会へ移動するなどして減少していった。1980年代以降、韓国本国から牧師が派遣されるようになったことに加え、近隣にオーソドックスな韓国系ニューカマー向けの教会がなかったことから、韓国系ニューカマーが集うようになった同教会は、新たな課題を抱えるようになった。

教会内で韓国系ニューカマーが信者の多数を占める一方、現牧師（韓国系ニューカマー）は日本宣教を活発に行うことで一定数の日本人信者を獲得している。教会運営は牧師と役員が共同で行っているが、実質的には牧師が中心となっている。韓国系ニューカマー牧師による牧会のもと、在日コリアン信者への配慮は影を潜めたが、韓国語礼拝や韓国語カフェといったエスニックなプログラムや行事などの形式は周辺化されながらも維持されている。本章ではその理由として、第一に、日本宣教の手段としてエスニックな形式を利用していること、第二に、教会の財政的にも人材的にも韓国系ニューカマーに頼らざるをえず、彼／彼女らをひきつける必要があることを論じた。

以上から広島第一教会は、在日コリアンのための教会という形態からは離れて、日本宣教と韓

国系ニューカマーの参与の両立を目指すような組織マネジメントを行ってきたことがわかる。

第7章では、首都圏を代表する在日コリアン集住地域の一つである東京都荒川区に立地する東京福音教会を事例に、終戦後の再建過程を明らかにした。戦前にアメリカ人宣教師の援助によって設立された東京福音教会は、戦時下に日本の教会に編入された。戦後は自力での存続ではなく、在日大韓基督教東京教会への合併を選択した。だが一部の信者が独自に家庭礼拝を始め、そこにアメリカ人宣教師の後継の宣教団体が支援を行うようになった。それにより再建はスムーズに進められていったが、在日コリアンたちの中で、自分たちのコンテクストに必ずしも配慮しない(できない) 宣教団体への不満が生じた。そこで在日大韓基督教と不即不離の関係を築きながら、それとは別個のエスニック・チャーチとしての再建を進めていった。最終的には、1960年に宣教団体から自立するとともに単立の在日コリアン教会へと変貌を遂げていった。1960年以降は、新たに来日する在日コリアンを包摂しつつ、在日コリアン二世への信仰継承を模索し、在日コリアンのためのエスニック・チャーチとして、その機能・役割を維持/継承させようとしていた。東京福音教会は戦後、海外宣教団体と在日大韓基督教の間で揺れ動きながらも、最終的には「独立」し、自立的な教会運営を行ってきた。同教会の場合においても、基本的な路線としては、在日コリアンのためのエスニック・チャーチとして運営されてきたことが理解できる。

第8章では、東京福音教会における1980年代以降の動向から、その組織マネジメントの特徴を明らかにした。1980年代以降、韓国系ニューカマー牧師が赴任するようになった東京福音教会では、そういった牧師の存在に加え、同教会の存立基盤や財政的な安定性に魅力を感じるなどして韓国系ニューカマーが参与するようになり、教勢が瞬く間に拡大した。一方で新旧コリアン間では宗教的実践をめぐる両者の対立がしばしば顕在化した。単立教会であることを背景に、教会運営のイニシアティブを長らく握ってきたのは、基本的に在日コリアン長老であった。長老は韓国系ニューカマー牧師・信者を「新参者」として受け入れつつ、在日コリアンが慣れ親しんだ教会活動の維持ないし回帰を志向してきた。そのため、韓国系ニューカマー牧師によって長老の運営路線にそぐわない独自の教会運営が行われた際には、牧師の辞任などの処置がとられ、韓国系ニューカマー信者の減少がみられたことを論じた。

以上から、東京福音教会は在日コリアンである長老と韓国系ニューカマー牧師の間で志向性の違いがみられ、在日コリアン長老の運営方針から外れない範囲で韓国系ニューカマー牧師の牧会がなされてきたことがわかる。このことから、同教会の組織マネジメントは、在日コリアンたちへの配慮を最優先にするエスニック・チャーチとして運営しつつも、それに反しない程度に韓国系ニューカマーたちのニーズも反映させるという意味で、重層的な構造を有する形態だといえる。

補論では、東京福音教会における国際結婚夫婦(韓国系ニューカマー妻と日本人夫)に焦点を当て、教会の提供する宗教的プログラムが、国際結婚夫婦の信仰にどのような影響を与えるのかを明らかにした。調査対象とした国際結婚夫婦は、当初、韓国系ニューカマー妻が自らの言語や習慣に親和的な教会で熱心に活動する一方、日本人夫は韓国系ニューカマー妻に付き添う周辺の信者として同じ教会に参加していた。だが2008年以降、夫婦の通っていた教会の信者が減少し、日本への定住志向がある信者の割合の相対的な増加によって、日本語話者を定着させるため

の宗教的プログラムが充実した。そうした中で日本人夫が教会活動へ積極的に参与し、韓国系ニューカマー妻の信仰のあり方を目標とするようになった。こうして国際結婚夫婦は、教会の中心メンバーとなったが、夫婦関係に加えて信仰面から見た上下関係が、教会への帰属意識よりも優先され、教会内でトラブルが起きた際には夫婦揃って他の教会に移るケースがみられた。

以上から、日本語話者を定着させるための教会の宗教的プログラムが、日本人夫の教会活動への参与を活性化させ、国際結婚夫婦間に存在する宗教的実践の差異を信仰面から捉え直させる一方で、それがかえって夫婦とともに教会から離れさせる要因にもなりうることを指摘した。

終章では、各章の要約をした後、本研究の総括として各事例の組織マネジメントの特徴とエスニック・チャーチとしての変容パターンとそれを規定した要因、および今後の課題を示した。

戦時下、本論文で扱ったいずれの在日コリアン教会も日本基督教団への編入を余儀なくされ、終戦を迎えるまでそのエスニシティを強調することは抑圧されていた。各教会は終戦後、そこから即座に脱退したが、戦前とは在日コリアン人口が減少し、南北対立による同胞間での対立状況があるなどして、少なからず困難さや葛藤を抱えながら、エスニック・チャーチとしての再構築・維持がなされていた。

1960年代から1970年代にかけて構成員が在日コリアン二世へと世代交代していく中で、1980年代以降、グローバル化を背景とする韓国系ニューカマーが参与する事態が生じた。これによって、在日コリアン教会では牧師の確保が容易になるとともに信者の増加がみられるようになったが、多くの韓国系ニューカマーを抱えるようになった教会の中には、それまでの在日コリアンのためのエスニック・チャーチとしての理念や活動内容を維持存続することが難しくなっていたものもあった。一方で、韓国キリスト教的なスタイルを内面化し、奉仕活動に熱心に取り組み、教会を実質的に支えるようになってきた韓国系ニューカマーをいかに受け入れるかという包摂の在りようと在日コリアンのためのエスニック・チャーチとしてどのように維持・継承するのか（しないのか）が各教会で課題となった。そこで組織マネジメントが行われ、教会の理念や活動面の見直し・刷新につながったというのが本論文の主張である。

各教会の組織マネジメントからその変容パターンを分類すると、従来の在日コリアンのためのエスニック・チャーチとしての形態との関係や韓国系ニューカマーの包摂のあり様からいえば、大阪教会は、在日コリアンのためのエスニック・チャーチとして部分的に持続しながら、韓国系ニューカマーを含むマイノリティ全般を包摂するような理念を掲げ活動を展開している。これは、在日コリアンという「中核」的な集団に配慮しつつ、包摂する対象を拡張していくといった意味で、①「拡張型」だといえよう。

広島第一教会は、在日コリアンのためのエスニック・チャーチとしての形態からは「脱皮」し新たに日本宣教を掲げ活動する一方で、韓国系ニューカマーを日本人よりも優先されない存在として扱いつつ包摂するような取り組みもみられた。これは、在日コリアンのコンテクストとは断絶した活動を展開し、日本人や韓国系ニューカマーを包摂している点で、②「変質型」だといえる。

東京福音教会は、在日コリアンのためのエスニック・チャーチとしての運営体制を依然として維持しつつも、韓国系ニューカマーのニーズも状況に応じて部分的に反映させてきた。これは在日コリアンという「中核」的な集団を最優先と位置づけつつ、他の集団もそれに反しない程度に

包摂しているという点で、③「重層型」というように分類することが可能だろう。

このように、戦前から戦後にかけて在日コリアンのためのエスニック・チャーチとして活動していた教会群は、1980年代以降、組織マネジメントの違いを背景とする展開上の差異が生じた。本論文では、教会ごとに組織マネジメントに差異が生じた要因として、長老制における牧師 - 長老間の力関係のグラデーションと各教会が置かれた地域的コンテクストをあげた。

信者の代表として古参信者を教会運営の中核に参与させる長老制は、原理的に言えば「伝統」を保持しやすいため、在日コリアンのためのエスニック・チャーチとしての形態が維持されやすい運営形態だといえる。一方で、長老制を採用していても牧師が教会運営の主導権を握っていれば、その「伝統」に配慮する必然性はなくなる。各教会の組織マネジメントをみると、広島第一教会では、韓国系ニューカマー牧師が教会運営の主導権を握っていたため、日本宣教というそれまでの「伝統」に依拠することのない活動を展開し、東京福音教会はそれとは対照的に、在日コリアン長老がその主導権を握り、「伝統」に則った教会運営が行われていた。大阪教会では、牧師と長老が比較的均衡を保っていたため、「伝統」に配慮しつつ、他集団に対してもアプローチするような組織マネジメントが行われてきたことを指摘した。

各教会が立地する地域的コンテクストについて、日本最大の在日コリアン集住地域である生野区に立地する大阪教会の社会活動は理念上、誰もが参加できるものの、実際の参加者は地域の特徴を反映して在日コリアンが中心で、彼／彼女らに配慮したプログラムが設けられてきた。こうした地域的な特徴が、マイノリティ全般の包摂というベクトルだけでなく、在日コリアンのためのエスニック・チャーチという「伝統」も維持している同教会の組織マネジメントにつながったと考えられる。広島市に立地する広島第一教会の場合、市内に競合する在日コリアン教会への古参信者の移動がみられ、かつ同教会以外に韓国系ニューカマー向けのオーソドックスな教会が市内になかったため、「伝統」を維持・継承する人材が不足するとともに韓国系ニューカマーが参与し実質的に教会を支えるようになった。そのため、同教会は在日コリアンのためのエスニック・チャーチという形態から変質し、日本宣教を掲げる一方で韓国系ニューカマーも包摂するような組織マネジメントを行うようになったものとみられる。首都圏を代表する在日コリアン集住地域の一つである荒川区に立地する東京福音教会の場合、同地域内に林立する新興の韓国系キリスト教会とは異なり、戦前から同地域に根ざしながらも韓国系ニューカマー牧師を迎えているというオリジナリティを有していた。そのため、多くの韓国系ニューカマーが押し寄せ、牧師の発言力も相対的に強まっていったが、在日コリアン長老主導の教会運営を変革するには至らなかった。だが、韓国系ニューカマーの存在は同教会において欠かせないものであることから、「伝統」に則った教会運営に反しない程度にそのニーズにも対応する組織マネジメントを行うようになったと考えられる。

以上の考察から、長老制における牧師 - 長老間の力関係のグラデーションと各教会が立地する地域的コンテクストは、ともに各教会の組織マネジメントを左右した要因だといえる。

4. 本研究の成果と課題

本研究の知見を箇条書き的にまとめると次のようになる。

①エスニック・チャーチの継承／変容という観点から在日コリアン教会の複数の変容パターン

を析出した点。

- ②教会内のコリアンのエスニシティが重層化したことを契機とした変容パターン（従来のエスニック・チャーチからの変化のかたち）を実証的に論じた点。
- ③在日コリアン教会の展開上の差異を決定づけた組織マネジメントが、宗教組織内外の要因によって規定されていることを指摘した点。

①について、そもそもエスニック・チャーチを対象とした研究は、日本においてはニューカマーの宗教が主流であり、その継承／変容は論じられにくい傾向にあった。本論文で示した多様な変容パターンによって、エスニック・チャーチの継承／変容論の一端を示すことができたと考えられる。

②について、在米コリアン教会の先行研究では、移民二世や三世の世代交代によるエスニック・チャーチの組織変革といった観点からの分析は多いものの、新旧コリアンというサブ・エスニック集団間の関係がもたらす組織への影響について実例を持って考察したものは少ないといえる。本論文の知見から、同じ宗教を信仰しながらもそれに対する取り組み方や宗教的実践の異なるサブ・エスニック集団の参与が、それまで維持されてきたエスニック・チャーチとしての機能を変容させるだけでなく、韓国系ニューカマーの奉仕によって老人大学の活動が維持できている大阪教会の事例のように、むしろ従来の機能を部分的に持続させる要因ともなりうると指摘できる。

③について、「移民と宗教」研究において、宗教（組織）内部だけでなく、地域社会との関わりを論じることが重要であると指摘されているが（高橋 2013: 442）、本論文はそれを実証的に示した一例だと位置づけられよう。

今後の課題としては、第一に本研究で扱えなかった在日コリアンの非集住地域におけるキリスト教会との比較検討である。近年、外国人住民の非集住地域を主題化し、当該地域での多文化化の状況を考察する貴重な論考が提出されているが（徳田ほか 2016）、そうした知見を参考にしつつ、「在日コリアンとキリスト教」研究を地域社会のコンテクストとより深く結びつけて発展させていく必要があるだろう。第二に、教会組織だけでなく個人レベルの教会選択・移動とアイデンティティの絡み合いといった点を踏まえて、総合的に両者の関係を論じる視点である。在日コリアン個人に焦点を当てると、在日コリアン教会以外にも日本の教会に行ったり、教会に行かず自宅で信仰生活を送ったりするなど、さまざまな形態がみられる。そうした複数の選択肢の中で、なぜ在日コリアンは在日コリアン教会を選択したのか／選択しなかったのか、といった問題についても今後検討していく必要があると考える。

参考文献

- 高橋典史, 2013, 「外国人支援から見る現代日本の「移民と宗教」」吉原和男編『現代における人の国際移動』慶應義塾大学出版会, 437-456.
- 徳田剛・二階堂裕子・魁生由美子, 2016, 『外国人住民の「非集住地域」の地域特性と生活課題』創風社出版.
- 渡戸一郎, 2006, 「地域社会の構造と空間」町村敬志編『地域社会学講座 1 地域社会学の視座と方法』東信堂, 110-130.